シュネシオスと五世紀アレクサンドリアにおける夢解釈

——神に近づくこととしての夢見——

ブロンウェン・ニール
（土橋恵子 訳）

「夢よりも豊かで魅惑的なものが他にあり得るだろうか？」

Synesius, *De insomniis* 12.[1]

古代末期のキリスト教において、幻視や夢、さらには夢象徴主義などに対する態度は、どう少なく見積もってもアンビバレントなものであった。[2] 異教徒たちによって編まれた夢解釈の手引書は、キリスト教徒にとってタブーであった性的な事柄について書かれていたという理由もあって閲読が禁じられていたが、その一方で、ビザンツ世界でも匿名による夢解釈の手引書が書かれており、キリスト教の平信徒にむけて、夢で見たイメージをどう解釈すべきかについて語られていた。そもそも神的な霊感の問題は、夢や幻視について解説を求められていたキリスト教徒や異教徒たち双方の解釈者にとってやっかいな問題であった。確かに、後代のキリスト教徒側の夢解釈者たち、たとえば、大グレゴリオスやかつて預言者ダニエルのものとされた重要な夢解釈を著した匿名著者にとって、こうした問題に対する自分たちの解釈と異教徒の解釈が異なるのはごく当然なことであった。しかし、五世紀初頭のアレクサンドリアの時代状況にあっては、両者の立場の相違はそれほど明瞭なも

のではなかった。このことは異教哲学を奉じる〔新プラトン主義者〕シュネシオスの作品からも明らかである。このシュネシオスとは、アレクサンドリアの総主教テオフィロスからキュレナイカ[3]にあるプトレマイスの司教に任命されるおよそ五年前つまり四〇五年ないし四〇六年に、夢解釈についての小冊子を書いた人物である。本稿では、想像力こそが夢を生じさせる魂の能力であるという彼の夢理論の独創性について考察がなされる。

1. シュネシオスの生涯と作品

デニス・ロック[4]が著した伝記によれば、プトレマイスの人々から司教に選ばれた四一一年前後に書いたとされる書簡類によってシュネシオスはもっともよく人々に知られている。ロックによれば、シュネシオスは四一二年の一月にテオフィルスによって正式に叙階されたが、そのわずか一八か月後の四一三年中頃に亡くなったものと思われる。ブレグマンは、彼の死がおそらく四一三年か四一四年であろうと考えている。[5]クローディア・ラップの指摘によると、彼は二つの異なった権威、すなわち、実用主義的な権威と精神的な権威を兼ね備えていた。前者は、貴族階級に属するがゆえに諸事万端に通じ広く周囲に影響を与えずにはおかない彼の能力に由来するものであり、後者は彼の哲学的陶冶によるものである。「それゆえ、司教職に就いたシュネシオスの内に明瞭に認められた特徴は、彼のもつ実用主義的権威と、それには少し及ばないものの深い宗教的人格に裏打ちされた精神的権威であった。そのどちらも、司教職に任命される以前から影響力の点でもその本質においても変わることはなかった[6]」。三九七年から四〇九年にかけての彼とキリスト教教会との関係は明らかではない。新プラトン主義的信念から彼が徐々に回心したと主張する者もいれば、司教となってからも決してその信念を曲げなかったと主張する者もいる。三区分に階層化された実体の本性（上から順に、知性〔mind〕、魂〔soul〕、物質〔matter〕）および神的なものと魂の関係についての彼の信念は、プロティノス、プロクロス、ポルフュリオスなどから直接受け継いだものであろう。こうした新プラトン主義からの影響については、現代のシュネシオス研究者たちがたびたび指摘している。ブレグマンはさらに、その著作の背後にカルデア神託（*Chaldean Oracles*）の影響があるとも考えている。し

かしながら、本稿が示唆しようとするのは、シュネシオスが神との合一の可能性を説いたプロティノス的考えを夢解釈という聖なる手段を使って発展させたのは、神化（テオーシス）という東方キリスト教固有の教説の影響があったからではないかという考えである。もちろん、睡眠についてのアリストテレスの理論や世界魂についてのストアの唯物論的主張もまた少なからぬ影響を及ぼしているに違いない。[7]

2. 『ディオンについて』における神化

まずは、『夢について』（*De insomniis*）と同時期に書かれたシュネシオスの別の作品から見てみよう。それは、『ディオンについて』（*On Dio*）という神秘的観想について書かれた小冊子であるが、それは彼の人生の弁明書（*apologia de sua vita*）でもある。フィロストラトスによって歴史的著作も含めあらゆることに優れていると絶賛された一世紀半ばの〔いわゆる第二〕ソフィストであるプルサのディオン・クリソストモスがこの作品の主題であるが、[8] ブレグマンが指摘しているように、シュネシオスはその中で「哲学への転向」について述べている。[9] 彼は観想の必要性について次のように語っている。「善に向かって進んでいかねばならない。しかもそれは、理性によってである。なぜなら知性とは、可知的なものと結合するものの名称だからである。それゆえ、天上的なものにひたすら目を向けることが我々の目的であるなら、単に地上的なものから目をそらすことだけでは十分ではなく、地上的なもの（の感覚）と天上的なもの（の観想）の途上にある領域を経て、己のまなざしをさらなる高みへと向けねばならない[10]」。

おそらく、『ディオンについて』と『夢について』の主たる違いは、前者では、哲学的上昇すなわち知恵による上昇において神へと上昇するのはあくまで知性であるのに対し、後者では、夢において神と合一するのは魂の物質的な部分、すなわち気息（プネウマ）であるという点であろう。どちらの場合も、「身体的快楽への欲望から解放されること」による徳の形成や魂の浄化が必要である。[11] しかし、それを成し遂げるためには、神化（テオーシス）が必要である。「しかし、上昇させる力が必要である。なぜなら、人は邪悪でないだけでは不十分であり、自らが神的でさえあらねばならないからである。こうした状態は肉体と肉体に

かかわる事柄からできるだけ目をそらし、知性を通して神へと目を向けることにきわめてよく類似している」[12]。

3．シュネシオスの『夢について』

この小論は主に、魂の本性について、さらには神的なものと魂の関係についての講話である。そもそも、シュネシオスにとって夢とは、あるいは彼が時折そう呼んでいた神託とは、いったい何なのだろうか？　それは睡眠中に頭の中で無秩序に生まれてくるものというよりは、神的霊感を受けた幻視に近い。実際に、ある夜そのような幻視の中でこの小冊子が自分に手渡された、と彼は語っている[13]。「その小冊子には、想像力を有する限りのすべての魂に関する、あるいはまたギリシアの哲学者たちが今まで誰も論じてこなかったその他のいくつかの論点に関する考察が含まれていた[14]」と彼は述べている。彼の精緻な解釈によれば、神によって植え付けられた魂の能力であり、肉体と魂がそこで融合する深い淵または空間とみなされる想像力の産物こそが夢である[15]。その際、想像力という語はプネウマや霊という語とほぼ同義的に用いられている。フィッツジェラルドは、プネウマとは魂が物質の中に取り入れられることを可能にする一種の被膜のようなものであると定義している[16]。シュネシオスにとって、想像力とは神的なものを獲得し、将来についてのメッセージを受け取ることができる能力である。夢の予言的な意味を読み取るこの神的な能力は、理論的にはすべての人に開かれている[17]。

> 我々はそれ（夢による予言〔すなわち夢占い〕）に取りかからねばならない。老若男女、富めるもの貧しいもの、一般市民も統治者も、町に住む者も田舎に住む者も、職人も演説家も、みな同じように。夢による予言は、いかなる民族も、年齢も、身分も、職業も、拒みはしない。

しかし実際のところ、自らが夢で見たものを解釈する知恵を持っていたのは、哲学者だけであった。哲学は「感情に流されない」ものであり[18]、そのような「情念からの脱却（アパテイア）」は禁欲的キリスト教徒や新プラトン主義者に共通した理想であった。「〔情念という〕漠然とした力をただひたすら受容するようなものとしてではなく、自らが知性や神の方向

づけに適うようなものとなるようにして、神的プネウマを準備することが最善の方法である」[19]。ゆえに、夢を見ることは神との合一の一形態であり、ある種の真実在の観想であった。ただし、シュネシオスは時に「神（God）」について語りはするものの、たいていの場合は「神々」や「神的なもの」について語っている。彼の説くところによれば、「宇宙の神々はまた、〔神的プネウマが〕本性的に同じ起源を有するという事実によって、〔夢予言〕にも関係づけられる。」[20]しかし、「神々」は、往々にして夢予言よりも他の予言を優先する神働術的な秘儀的儀礼を忌み嫌う、というのが彼の主張であった。[21]新プラトン主義者の中でも特にイアンブリコスにとっては、神働術（テウールギアー）とは、人間と神々の間に存在すると信じられていた様々な神霊（ダイモーン）たちを鎮めることによって人間と神々とを仲介する手段とみなされていた。対して、同じ新プラトン主義とはいえシュネシオスが与したのは、アレクサンドリアの学園での師「ヒュパティアから教えられた、決して神働術を認めることのなかったポルフュリオスの立場」[22]であった。実際、彼は夢についての自分の著作が発表される前にその写しを彼女に送ったと述べている。[23]彼の夢予言のやり方は神に近づくための仲介を求めるのではなく、魂の浄化と徳を求めるものであった。[24]「夢によってどんな考えが予言されようと、どれだけ多くのことを知性から受け取ろうと、そうしたものの一切は、夢が解釈される時に、その夢解釈を受け入れる人々にもたらされ、神的なものに由来する限りのすべてが彼らへと手渡される」[25]。この引用からは、夢予言が神々の将来の行いを観想することによって得られる神的なものとの合一すなわちある種の神化であるという彼の信念がはっきりと見て取れるだろう。

『夢について』においては、当時広く流布していたキリスト教哲学者たちの教義に反対し自らの信念を擁護すべく奮闘している哲学者というシュネシオスの印象がさらに強固なものとなる。その小論において、シュネシオスがキリスト教徒に共感的であったことを示す箇所はたった一か所しかない。そこで彼は次のように述べている。すなわち、夢予言を通して真実を探し求めることによって、「最初はこの目的を目指してはいなかった者たちも、歩みを進めるうちに、神（God）を愛しいつかは神と一体となる」[26]と。このように、夢予言を軽蔑する人たちに対して、彼はそれを神的なものへ通じる道として擁護していたのである。[27]

未来の出来事すべてが、神の摂理によって望ましい未来であると保障されているわけではない。もしそれが悪い未来ならば、予知することによって避けることができるかもしれない。シュネシオスは、コンスタンティノポリスへ三年間ほど使者として赴いた際に、彼に対して騒動を起こした魔術師の陰謀をそうした悪い未来の例として挙げている。夢の中でよい未来を予知する例としては、自分が書物の次に夢中になっていた狩猟がうまくいく夢を挙げている。確かに、これはかなり些細な例に思われるかもしれないが、おそらく彼が語りかけようとした聴衆が、キリスト教徒であれ異教徒であれしかるべき教育を受けた貴族たちであり、哲学やその他の有閑階級の慰みごとに専念できた人々であったことを表しているだろう。

明瞭ではっきりした夢を見るのは、「徳に従って生きている人だけである。そのような徳は知恵によって得られるか、あるいは習慣によって体得されるものである」[28]。対して、ごく普通の人の見る夢は謎に包まれているので、誰かもっと知恵のある人に解釈してもらわなければならない。しかしながら、その一方でシュネシオスは、魂が神的な領域に至ることを阻むものは何もないと読者に保証している。「しかし、身体的本質に関しては、それがそもそもそこ〔神的な領域〕に由来する以上、魂が自らの本性に従って上昇する時、その堕落した状態から抜け出すこと、すなわち魂と共に上昇し天空とつながりながら、あたかも自身の本来のあり方にまで持ち上げられるかのようなことを妨げるようなものは何もない」[29]。これは、シュネシオスが魂の上昇の目的は神化であると主張するに至ったということとほぼ同じである。しかし、霊的な被膜すなわちプネウマは各自の知性の使い方次第で、善くも悪くもなり得る。もしそれが善であれば、その暖かさと渇きは、魂に本来備わっている神とのつながりによって、神に向かってプネウマ（神的な霊的被膜）を引き上げる。彼はここでヘラクレイトスの「知恵ある魂は乾いている」という言葉を引用している[30]。もしプネウマが悪であれば、それはあまりにも強く圧縮されるので、邪悪な霊的被膜（evil spirit-envelope）は脳の隙間に入り込み、それを引きずり下ろす。これは、己の内にある神的部分が損なわれてしまった神を信じない者たちに訪れる運命である[31]。

4. 想像力の働き

シュネシオスにとって、夢を見るという人間の活動は、想像力あるいは想像力を用いる知性に基づく。夢を見るという活動において起きていることは、いわば魂の第二の生において起こることと少なからず似通っている。[32] 夢見という活動における善きふるまいはプネウマを明るく照らし、夢見る者を神に近づけるが、悪しき行いはその反対である。[33] 真に存在するものを観想することが、夢見る魂の目標である。魂が夢を見ている時、たとえもっとも不注意で訓練されていない知性でさえも、知性界に至ることができるのである。[34]

彼は、「幸福な合一」(τὴν εὐδαίμονα συναφήν) について、それが想像力によってのみ得られると語っている。[35] 想像力に基づく夢見という活動は、知恵のある人が神に出会うことのできる場所だと言い得るだろう。彼は『夢について』の序文の中でこう述べている。「それゆえ、知恵のある人は神に似ている。なぜなら、そのような者は自らの知によって神に近づこうと努め、思考に専念するが、その点においてこそまさに神の本質は実在するからである」。[36]

5. プロティノスとアウグスティヌスにおける神との合一

プロティノスの著作を見る限り、物質的な身体に閉じ込められつつも神と合一する可能性についてはかろうじて認められているに過ぎない。そのような魂の上昇が可能となるためには、肉体の誘惑や情念から完全に解き放たれる必要がある。彼の弟子であるポルフュリオスの手になる師の伝記『プロティノス伝』によれば、彼はその生涯においてこのような〔神との神秘的な合一体験である〕脱我状態(エクスタシス)を四度経験した、と記されている。[37]『エンネアデス』VI. 6. で、彼はすべてを超越することによってこの合一を手に入れた礼拝者たちの話をする。[38] 彼らは、遠く離れた神殿へと上ろうとする人々が秘儀に与り衣を脱ぎ棄てていくように、可知的なものの一切から脱却していくのである。『エンネアデス』IV8. 1に、プロティノスがこのような個人的経験について語った唯一の記述がある。それによれば、彼は身体から自己自身へと引き上げられ、「他のものの一切から外に出て、……神的なものと一体となり、神的な活動を成し遂げたことによって神的なものの座を占め、あらゆる可知

的なものを超えたかのもののうちに保たれた」[39]。『エンネアデス』の最後のページでは、いかにすれば人は脱我状態を経て「一者」との合一という高みへと引き上げられるのかについて書かれている。そこで神殿の聖域への入場に例えられていることこそ魂の飛翔に他ならない[40]。

ヒッポのアウグスティヌスの『告白』の中にも、彼がキリスト教に回心する以前の脱我経験に関する記述が二つ見出せる。彼はその経験を「不変の光の観想」と表現している。しかしそれにもかかわらず、彼は、自分が真の仲保者であるキリストを知る以前にたまたま得たそのような善との束の間の出会いが、後になって考えてみると、いかに不満足なものであったかを強調して止むことがない。実際、キリストによってこそ、彼はより完全に、しかも永続的に神と見えることができるようになった（『告白』7.10.16, 7.17.23）。後のヒッポの司教の母がオスティアで亡くなるほんの少し前に、彼ら二人は絶えることのない観想の中で天に召されたいという望みを語り、脱我的な見神体験を得た[41]（『告白』9.10.23-25）。彼ら二人のこうした見神体験とプロティノスの脱我体験とを較べてみると、両者の間にはかなり大きな違いがある。というのも、プロティノスは、必ずしも死後において「一者」についての永続的あるいは卓越した観想というものがあるとは信じていなかったからである。

6．「復活」というキリスト教教義に対して

身体と魂がプネウマを介して交わることができるというシュネシオスの根本的な信念は、身体の復活というキリスト教教義についての彼の理解を示唆するものである。彼は、その教義が非常に受け入れがたいものであると書簡（『書簡集』105）の中で告白している。シュネシオスの伝記を纏めたブレグマンによれば、シュネシオスは、身体の死後に魂が生き残るかどうかという問題に自分なりに解決を見出していたものと思われる[42]。いずれにせよ、『夢について』を執筆したほぼ五年後に周囲から勧められた司教職就任をなんとか回避しようと、シュネシオスが公然とキリスト教信仰を避けていたことは確かなことであるが、それにもかかわらず夢について書かれたこの小著を見る限り、少なくとも彼がキリスト教信仰から完全に遠ざかっていたわけではないように思われる。彼はまた、被造世界に終わりがあ

ることや信仰者の復活といった教義を拒んだように、魂が先在するという哲学的信念を放棄することもまた頑に拒んでいた。彼の兄弟エウオプティオスに宛てた書簡（『書簡集』105）の中で、シュネシオスは、自身の考えが学者たちの知るところとなれば、彼らはきっとテオフィロスにそのことを伝えてくれるだろうという思いを吐露している。[43]

> さて、ご存じのとおり、哲学は多くの一般の人々が心に抱いている確信の多くを否定するものです。私はといえば、魂が身体よりも後にできるなどとはまったく承服できません。世界やその構成要素が滅びなければならないということを決して認めることはできません。多くの人たちが信じる復活は、私にとっては神聖で神秘的な比喩以外の何ものでもありません。私が俗悪な大衆と考えを同じくすることなど、決してありはしないのです。

いずれにせよ、もう少し控えめで抑えた表現も交えたこの書簡によってテオフィロスの意向を変えることは叶わず、結局のところ、シュネシオスは予定通り司教職に就くことになったのである。[44]

7. 結論

一人の哲学者でありのちに司教となる人物が、宗教的経験の枠組みの中で夢と予言の位置づけを理解しようとした試みを跡づけることによって、五世紀初頭にシュネシオスのように実践的権威と精神的権威の両方を兼ね備えた人物が被らざるを得なかった数多の苦闘は垣間見られる。夢において神的なものに触れるため、またそうした夢見の状態にある人を変容させるための力を想像力が有していると信じたシュネシオスの夢解釈は、確固とした新プラトン主義的背景をもつと同時にキリスト教に関しても相応の理解があったという点で独創的なものであった。彼は、従来の新プラトン主義者と違い、有徳者は夢見ることによって神になり得るという意味で、夢見をある種の神化（テオーシス）であると考えていた。これは理論的には万人に開かれた能力であり、魂の上昇に関してプラトン的議論の規範となっていた哲学者の知的観想という考えよりもある意味でずっと民主的なものであった。彼の解釈によれば、魂の物質的

部分（プネウマ）は、もしそれが暖かく絹のように薄ければ魂の上昇を可能にし、神へと引き寄せられることが可能となるが、もしそれが邪悪な行いで圧縮されるならば肉体への堕落を引き起こすことになるとみなされた。しかし、このような彼の考えは、当時のキリスト教徒たちから見れば、新プラトン主義からの影響を受けながらもなお正統性を保ったアウグスティヌスのような正統派教父のものでは決してなかった。

『夢について』執筆からほぼ五年後に司教職に就いた後、シュネシオスはいわば思想上の自己同一性危機に陥り、魂と復活についての彼の哲学的信念を曲げるくらいなら死んだほうがましだと告白している。キュレナイカの司教団に宛てた彼の書簡（『書簡集』11）は、司教職を受け入れ、教会への奉仕を続けることの内にあって、なお自身の魂の上昇が可能であるという以下のような希望の言葉によって締め括られている。

もし神が私をお見捨てになっていなければ、この司教の仕事は哲学からの退歩ではなく、むしろ逆に、そこへの更なる一歩であるということを私はきっと知ることになるでしょう。

残念ながら、その三年後に彼は帰天した。彼が最後に綴ったとみなされている二通の書簡（『書簡集』10, 16）は、両方とも四一三年に病床からヒュパティアに宛てたものである。その中で彼は、彼女が彼に返信してくれないことを嘆き、長男が最近亡くなって結局子どもたち全員が死亡してしまったことやペンタポリスの腐敗しきった統治者アンドロニコスと論争中であった友人を失ったこと、さらに人々から善意が消え失せてしまったことを語っている。しかし、ヒュパティアはこの書簡が書かれて間もない四一三／四一四年〔あるいは遅くとも四一五年〕頃には、アレクサンドリアでキリスト教の暴徒による集団暴行の末、死亡したとみなされている。結局のところ、シュネシオスも彼の師ヒュパティアも、新プラトン主義とキリスト教という二つの世界観が激しく衝突していた当時のアレクサンドリア文化の落とし子に他ならなかった。しかし同時に、シュネシオスは、神的なものとの霊的な合一に向けて夢がもつ可能性を認めることによって、この二つの異なった伝統に独自の視点で共通の地平を見出したと言ってよいだろう。

（オーストラリア・カトリック大学）

Bibliography

Primary Sources :

Aristotle, De insomniis et de divinatione per somnum

Drossart Lulofs, H. J. (ed.) *De insomniis et de divinatione per somnum* (Leiden: Brill, 1947).

Gallop, D. (trans.) *Aristotle on Sleep and Dreams* (Peterborough, Ontario: Broadview Press, 1991).

Ausustine, *Confessiones*

Wills, Gary (trans.) *St. Augustine. Confessions* (London and New York: Penguin, 2006)

Chaldean Oracles

Des Places, Edouard (ed.) *Oracles Chaldaïques* (Paris: Les Belles Lettres, 1971, rev. edn. 1989).

Majercik, Ruth (ed. and trans.) *The Chaldean Oracles* (Leiden: Brill, 1989).

Heraclitus, *Fragmenta* (see Saudelli below).

Plotinus, *Enneads*

Henry, Paul and Schwyzer, Hans-Rudolf (eds) *Plotini Opera*, 3 vols. (Oxford: Clarendon, 1964-1982).

MacKenna, Stephen and B. S. Page (trans.) *The Six Enneads*, rev. edn. (London: Faber and Faber, 1991).

Porphyry, *Vita Plotinii*

Henry, Paul and Schwyzer, Hans-Rudolf (eds.), *Plotini Opera*, vol. 1 (Oxford: Clarendon, 1964) 1-54.

Ps-Daniel, *Oneirocriticon*

Oberhelman, Steven M. (trans.) *Dreambooks in Byzantium: Six Oneirocritica in Translation, with Commentary and Introduction* (Abingdon: Ashgate, 2008).

Synesius of Cyrene, *Dion*

Terzaghi, Nicola (ed.) *Synesii Cyrenensis opuscula*, Scriptorum graeci et latini consilio Academiae Lynceorum editi (Rome: Typis Officinae Polygraphicae: 1944), 233-278.

Fitzgerald, Augustine (trans.), *On Dio*, in *The Essays and Hymns of Synesius of Cyrene. Translation into English with Introduction and Notes*, 2 vols. (Oxford; Oxford University Press; London: Humphrey Milford, 1930), 160-230.

Synesius of Cyrene, *De Insomniis*

Terzaghi, Nicola (ed.) *Synesii Cyrenensis opuscula*, Scriptorum graeci et latini consilio Academiae Lynceorum editi (Rome: Typis Officinae Polygraphicae, 1944), 143-189.

Fitzgerald, Augustine (trans.), *Concerning Dreams*, in *The Essays and Hymns of Synesius of Cyrene. Translation into English with Introduction and Notes*, 2 vols. (Oxford: Oxford University Press; London: Humphrey Milford, 1930), 326-358.

Synesius, *Epistulae*

Garzya, Antonius (ed.) *Synesii Cyrenensis Epistulae* (Rome: Typis Officinae Polygraphicae, 1979).

Fitzgerald, Augustine (trans.) *The Letters of Synesius of Cyrene* (Oxford: Oxford University Press, 1926).

Secondary Sources :

Allen, Pauline. 'Brushes with the Imperium: Letters of Synesius of Cyrene and Augustine of Hippo on Crisis', in *Basileia: Essays on Imperium and Culture in Honour of E.M and M.J. Jeffreys*, eds. G. Nathan and L. Garland, Byzantina Australiensia 17 (Brisbane: Australian Association for Byzantine Studies, 2011), 45-53.

Amat, Jacqueline. Songes et visions: *l'au-delà dans la littérature latine tardive* (Paris: Études augustiniennes, 1985).

Bregman, Jay. *Synesius of Cyrene, Philosopher-Bishop*, The Transformation of the Classical Heritage (Berkley, Los Angeles, London: University of California Press, 1982).

Consolino, Franca Ela. 'Sogni e visioni nell'agiographia tardoantica: modelli e variazioni sul tema', *Augustinianum* 29 (1989): 237-56.

Dickie, Matthew W. 'Synesius, *De Insomniis* 2-3 Terzaghi and Plotinus, *Enneades* 2.3.7 and 4.4.40-44', *Symbolae Osloenses: Norwegian Journal of Greek and Latin Studies* 77.1 (2002): 165-74.

Dossey, Lesley. 'Watchful Greeks and Lazy Romans: Disciplining Sleep in Late Antiquity', *Journal of Early Christian Studies* 21/2 (2013): 209-39.

Dulaey, Martine. *Le Rêve dans la vie et la pensée de saint Augustin* (Paris: Études augustiniennes, 1973).

Dzielska, Maria. *Hypatia of Alexandria*, trans. F. Lyra (Cambridge, MA and London: Harvard University Press, 1995).

Everson, Stephen. 'The *De Somno* and Aristotle's Explanation of Sleep', *The Classical Quarterly* 57/2 (2007) 502-520.

Graf, Fritz. 'Dreams, Visions, and Revelations: Dreams in the Thought of the Latin Fathers', in *Sub Imagine Somni: Nighttime Phenomena in Greco-Roman Culture*, eds. Emma Scioli and Christine Wade (Pisa: Edizioni ETS, 2010), 211-31.

Hanson, J. S. 'Dreams and Visions in the Graeco-Roman World and Early Christianity', in *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, II. 23.2, ed. Wolfgang Haase (Berlin: De Gruyter, 1980),

1395-427.

Krönung, Bettina. 'Ekstasen und andere Former von Visionserfahrungen in der frühbyzantinischen monastischen Literatur', in *Traum und Vision in der Vormoderne: Traditionen, Diskussionen, Perspektiven*, eds. Annette Gerok-Reiter and Christine Walde (Berlin: Akademie Verlag, 2012), 65-90.

Le Goff, Jacques. 'Le christianisme et les rêves (IIe-VIIe siècles)', in *I Sogni nel Medioevo. Seminario internazionale Roma, 2-4 ottobre 1983*, Lessico intellectuale Europeo 35, ed. Tullio Gregory (Rome: Edizioni dell'Ateneo, 1985), 171-218.

Lewy, Hans and Michel Tardieu, *The Chaldaean Oracles and Theurgy: Mysticism, Magic and Platonism in the Later Roman Empire*, 3rd edn. (Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 2011; orig. Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 1956).

Miller, Patricia Cox. *Dreams in Late Antiquity: Studies in the Imagination of a Culture* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1994).

Näf, Beat. *Traum und Traumdeutung im Altertum* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2004).

Neil, Bronwen. 'Neo-Platonic Influence on Augustine's Conception of the Ascent of the Soul in *De quantitate animae*', in *Prayer and Spirituality in the Early Church*, vol. 2, eds. Pauline Allen, Wendy Mayer and Lawrence Cross (Brisbane: Centre for Early Christian Studies, 1999), 197-215.

Oberhelman, Steven M. (ed.). *Dreams, Healing, and Medicine in Greece: From Antiquity to the Present* (Farnham; Burlington, VT: Ashgate, 2013).

Rapp, Claudia. *Holy Bishops in Late Antiquity: The Nature of Christian Leadership in an Age of Transition* (Berkley, Los Angeles, London: University of California Press, 2005).

Roques, Denis. *Synésios de Cyrène et la Cyrénaïque du Bas-Empire* (Paris: Éditions du CNRS: 1988).

Roques, Denis. *Études sur la correspondance de Synésios de Cyrène*, Collection Latomus 205 (Brussels: Latomus, 1989).

Stroumsa, Guy G. 'Dreams and Visions in Early Christian Discourse', in *Dream Cultures: Explorations in the Comparative History of Dreaming*, eds. David Dean Shulman and Guy G. Stroumsa (New York: Oxford University Press, 1999), 189-212.

Vanderspoel, John. Review of D. Roques, *Études sur la correspondance de Synésios de Cyrène*, Collection Latomus 205 (Brussells: Latomus, 1989) in *Bryn Maur Classical Review* 02.01.16(1991), at http://ccat.sas.upenn.edu/bmcr/1991/02.01.16.html (accessed 07.05.14).

Wagner, Kevin. 'Theophilus of Alexandria and the Episcopal Ordination of Synesius of Cyrene', *Phronema* 29/2 (2014) 127-172.

Wallis, Richard T. *Neo-platonism* (New York: Scribner's, 1972).

Seng, Helmut and Lars Martin Hoffmann (eds.), *Synesios von Kyrene: Politik – Literature – Philosophie*, Byzantios Studies in Byzantine History and Civilisation (Turnhout: Brepols, 2012).

Saudelli, Lucia. 'Un dit d'Héraclite dans la traité *Sur les Songes* de Synésios de Cyrène', in *Synesios von Kyrene*, eds. Seng and Hoffman, 231-46.

Pizzone, Aglae. 'Christliche und heidnische Träume: Versteckte Polemik in Synesios, *De insomniis'*, in *Synesios von Kyrene*, eds. Seng and Hoffman, 247-75.

Tanaseanu-Döbler, I. 'Synesius und die Theurgie', in *Synesios von Kyrene*, eds. Seng and Hoffman, 201-30.

＊本論文は二〇一四年九月七日に中央大学（駿河台記念館）で開催された講演会（平成二六年度科学研究費補助金基盤研究（C）［研究代表者：土橋茂樹］主催、教父研究会共催）で読まれた発表原稿に若干の加筆修正を施したものである。この会を主催された土橋茂樹教授、この論文を翻訳された土橋恵子氏、このセミナーの共催者であり教父研究会会長である出村和彦教授に心より感謝する。

（1）本稿で扱ったすべてのギリシア語テキストは Nicola Terzahgi, *Synesii Cyrenensis opuscula*, Scriptorum graeci et latini consilio Academiae Lynceorum editi (Rome, Typis Officinae Polygraphicae: 1944), 143-189 を用い、翻訳は主に Augustine Fitzgerald, *Concerning Dreams*, in *The Essays and Hymns of Synesius of Cyrene. Translation into English with Introduction and Notes*, vol. 2 (Oxford: Oxford University Press; London: Humphrey Milford, 1930), 326-58, at 354 を参照した。

（2）古代末期キリスト教における夢に関する最近の全般的研究は、出版順に次のようなものがある。J. S. Hanson, 'Dreams and Visions in the Graeco-Roman World and Early Christianity', in *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt, II*. 23.2, ed. Wolfgang Haase (Berlin: De Gruyter, 1980), 1395-427; Jacqueline Amat, *Songes et visions: l'au-delà dans la littérature latine tardive* (Paris: Études augustiniennes, 1985); Franca Ela Consolino, 'Sogni e visioni nell'agiographia tardoantica: modelli e variazioni sul tema', *Augustinianum* 29 (1989): 237-56; Patricia Cox Miller, *Dreams in Late Antiquity: Studies in the Imagination*

of a Culture (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1994); Guy G. Stroumsa, 'Dreams and Visions in Early Christian Discourse', in *Dream Cultures: Explorations in the Comparative History of Dreaming*, ed. David Dean Shulman and Guy G. Stroumsa (New York: Oxford University Press, 1999), 189-212; Beat Näf, *Traum und Traumdeutung im Altertum* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2004); Fritz Graf, 'Dreams, Visions, and Revelations: Dreams in the Thought of the Latin Fathers', in *Sub Imagine Somni: Nighttime Phenomena in Greco-Roman Culture*, ed. Emma Scioli and Christine Wade (Pisa: Edizioni ETS, 2010), 211-31; Bettina Krönung, 'Ekstasen und andere Former von Visionserfahrungen in der frühbyzantinischen monastischen Literatur', in *Traum und Vision in der Vormoderne: Traditionen, Diskussionen, Perspektiven*, eds. Annette Gerok-Reiter and Christine Walde (Berlin: Akademie Verlag, 2012), 65-90; Lesley Dossey, 'Watchful Greeks and Lazy Romans: Disciplining Sleep in Late Antiquity', *Journal of Early Christian Studies* 21/2 (2013): 209-39; and several chapters of Steven M. Oberhelman (ed.). *Dreams, Healing, and Medicine in Greece: From Antiquity to the Present* (Farnham; Burlington, VT: Ashgate, 2013). これらのうち、シュネシオスに言及しているのは、Cox Miller, *Dreams in Late Antiquity*, 70-73, Näf, *Traum und Traumdeutung*, 170-72, Stroumsa, 'Dreams and Visions', 194だけである。しかし、新プラトン主義哲学者としてのシュネシオスについての研究は数多くなされてきた。最近のものとしては、Helmut Seng & Lars Martin Hoffmann (eds.), *Synesios von Kyrene: Politik – Literature – Philosophie*, Byzantios Studies in Byzantine History and Civilisation (Turnhout: Brepols, 2012) がある。その中に *De Insomniis* について以下の三本の論文が所収されている。

Ilinca Tanaseanu-Döbler, 'Synesius und die Theurgie', 201-30; Lucia Saudelli, 'Un dit d'Héraclite dans la traité *Sur les Songes* de Synésios de Cyrène', 231-46, and Aglae Pizzone, 'Christliche und heidnische Träume: Versteckte Polemik in Synesios, *De insomniis*', 247-75.

(3) キュレナイカはシュネシオスの出身地キュレネがあった現リビア北部の地域を指す。プトレマイスは彼が司教に任命された地であり、リビアの海沿いにあって、キュレネのちょうど東側に位置する。

(4) ジェイ・プレグマンはシュネシオスの司教就任を四一〇年としているが、この点については多くの研究者が異議を唱えている。デニス・ロックもその一人である。Denis Roques, *Études sur la correspondance de Synésios de Cyrène*, Collection Latomus 205 (Brussels: Latomus, 1989), 47-64 は、

ロックが *Synésios de Cyrène et la Cyrénaïque du Bas-Empire* (Paris: Éditions du CNRS: 1988), 301-40 and 451 の中で初めて発表した従来の四一〇年説を覆す自らの年代想定を弁護するものであるが、ロックの説もまた同書を書評した John Vanderspoel (*Bryn Maur Classical Review* 02.01.16 (1991), at http://ccat.sas.upenn.edu/bmcr/1991/02.01.16.html.) によって疑問視されている。さらに最近のシュネシオス研究に関する文献としては、Pauline Allen, 'Brushes with the *Imperium*: Letters of Synesius of Cyrene and Augustine of Hippo on Crisis', in *Basileia: Essays on Imperium and Culture in Honour of E.M and M.J. Jeffreys*, eds. G. Nathan and L. Garland, Byzantina Australiensia 17 (Brisbane: Australian Association for Byzantine Studies, 2011), 45-53, at 46 n. 6; Seng and Hoffman, Synesios von Kyrene, 452-82; Kevin Wagner, 'Theophilus of Alexandria and the Episcopal Ordination of Synesius of Cyrene', *Phronema* 29/2 (2014) 127-172 などがある。

(5) Bregman, *Synesius of Cyrene*, 17.

(6) Claudia Rapp, *Holy Bishops in Late Antiquity: The Nature of Christian Leadership in an Age of Transition* (Berkley, Los Angeles, London: University of California Press, 2005), 165.

(7) アリストテレスとストア派の影響に関してはここでは詳しく述べないが、アリストテレスが夢における想像力 (φαντασία) について述べている以下の箇所を参照せよ。*De insomniis et de divination per somnum*, ed. H.J.Drossart Lulofs (Leiden: Brill, 1947) 459a14-22, 463b12. その中で、彼は夢の目的が神化である、または夢が神から送られることがあるということを否定しているが、「その起源は神的である。なぜなら自然は、それ自身は神的ではないが、神によって定められているからである。」(D.Gallop, *Aristotle on Sleep and Dreams* (Peterborough, Ontario: Broadview Press, 1991)) と述べている。この一節を指摘してくださった土橋茂樹教授に感謝する。また、以下も参照せよ。Stephen Everson, 'The *De Somno* and Aristotle's Explanation of Sleep', *The Classical Quarterly* 57/2 (2007) 502-520, at 517-518.

(8) フィッツジェラルド訳序文 *On Dio*, 211-13 を参照せよ。ディオン・クリソストモスは、おそらく彼の『道徳講話』、およびローマで行われたトラヤヌス帝の御前講話によってもっとも知られていると思われる。

(9) Bregman, *Synesius of Cyrene*, 127.

(10) *Dion* 9, ed. Terzaghi, *Opuscula*, 258; trans. Fitzgerald, 165.30-167.2.

(11) *Dion* 8, ed. Terzaghi, *Opuscula*, 252.

(12) *Dion* 9, ed. Terzaghi, *Opuscula*, 258; trans. Fitzgerald, 167.3-7.

(13) Synesius, *Ep*. 154 to Hypatia, ed. Antonius Garzya, *Synesii*

Cyrenensis Epistulae (Rome: Typis Officinae Polygraphicae, 1979), 276. 同書簡からの引用はすべてこの版からのものである。

(14) Garzya, ibid.; trans. Augustine Fitzgerald, *The Letters of Synesius of Cyrene* (Oxford: Oxford University Press, 1926), 254.

(15) Richard T. Wallis, *Neo-platonism* (New York: Scribner's, 1972), 104, and 108-9 はこの想像力のことを「プネウマの被膜」または魂の「星気体（霊体）」(astral body) と呼んでいる。

(16) *Ins*. X, ed. Terzaghi, 163.

(17) *Ins*. XIII, ed. Terzaghi, 170; trans. Fitzgerald, 345. 22-25.

(18) *Ins*. XVI, ed. Terzaghi, 178, trans. Fitzgerald, 351. 11-12.

(19) *Ins*. XVI, ed. Terzaghi, 178, trans. Fitzgerald, 351. 8-10.

(20) *Ins*. XIV, ed. Terzaghi, 176, trans. Fitzgerald, 349. 25-27.

(21) *Ins*. XII, ed. Terzaghi, 169, trans. Fitzgerald, 344. 29-30.

(22) Bregman, *Synesius*, 182. 哲学者であり数学者であったヒュパテイアに関するさらに古い文献は以下を参照せよ。Maria Dzielska, *Hypatia of Alexandria*, trans. F. Lyra (Cambridge, MA and London: Harvard University Press, 1995), 111-17.

(23) Synesius, *Ep*. 154, ed. Garzya, 276; trans. Fitzgerald, 254.

(24) *Ins*. XV, ed. Terzaghi, 176.

(25) *Ins*. XIV, ed. Terzaghi, 176; trans. Fitzgerald, 349. 21-25.

(26) *Ins*. XI, ed. Terzaghi, 166; trans. Fitzgerald, 342. 16-18.

(27) *Ins*. XI, ed. Terzaghi, 165.

(28) *Ins*. XV, ed. Terzaghi, 176; trans. Fitzgerald, 349. 31-32.

(29) *Ins*. X, ed. Terzaghi, 163; trans. Fitzgerald, 340.

(30) *Ins*. V, ed. Terzaghi, 156-7. Heraclitus, fr. 118DK を見よ。Saudelli, 'Un dit d'Héraclite', 232-9 は、クラクレイトス断片 118 における ξηρὴ（「乾いた」）を αὔη（「乾燥した」）への注記とみなす Terzaghi の修正（αὔη［ξηρὴ］ψυχὴ σοφή）を退け、元々の写本の読み αὐγὴ ξηρὴ ψυχὴ σοφωτάτη（「乾いた光こそが最も知恵ある魂である」）に従い、魂を光とみなす考えをクラクレイトスに帰している。確かに Saudelli の解釈は可能ではあるが、そのことがシュネシオスのプネウマ理解にとって決定的な意味をもつとは思われない。とりわけ、Terzaghi, *Synesii Cyrenensis Hymni*, vol. 2, xviii による限り、多くの異読写本の中で αὐγὴ という読みがただ一例の写本である *Paris gr*. 1039, ff. 153v-158r, *saec*. xii-xiv (siglum *o*) にしか見出されないという点は銘記されるべきである。

(31) *Ins*. X, ed. Terzaghi, 165.

(32) *Ins*. VI, ed. Terzaghi, 156.

(33) Ibid.

(34) *Ins*. IV, ed. Terzaghi, 151.

(35) Ibid.

(36) *Ins*. I, ed. Terzaghi, 145; trans. Fitzgerald, 328.3-5.

(37) Porphyry, *Vita Plotini* 23, eds. Paul Henry and Hans-Rudolf Schwyzer, *Plotini Opera*, vol. 1 (Oxford: Clarendon, 1964) 31.16-17.

(38) *Enn*. V1.6, ed. Henry and Schwyzer, vol. 2, 192-4; see Fitzgerald, *On Dreams*, commentary, 234.

(39) *Enn*. IV8.1, eds. Paul Henry and Hans-Rudolf Schwyzer, *Plotini Opera*, vol. 2 (Oxford: Clarendon, 1977) 165; trans. Stephen MacKenna and B. S. Page, *The Six Enneads*, rev. edn. (London: Faber and Faber, 1991) 334. この一節についての詳細は以下参照。Bronwen Neil, 'Neo-Platonic Influence on Augustine's Conception of the Ascent of the Soul in *De quantitate animae*' in *Prayer and Spirituality in the Early Church*, vol. 2, eds. Pauline Allen, Wendy Mayer and Lawrence Cross (Brisbane: Centre for Early Christian Studies, 1999), 197-215 at 207.

(40) *Enn*. VI9.11, ed. Henry and Schwyzer, vol. 3, 289.

(41) *Conf*. 9.10.23-24, trans. Garry Wills, *St. Augustine. Confessions* (London and New York: Penguin, 2006).

(42) ブレグマン（Synesius, 150-54）によれば、シュネシオスにとって個々の人格は不死なる魂の像として生き残ることができると考えられた。彼が明らかにしたところによれば、魂の復活に関するシュネシオスの考えはカルデア神託の影響を受けたものとみなされる。以下参照。Hans Lewy and Michel Tardieu, *The Chaldaean Oracles and Theurgy: Mysticism, Magic and Platonism in the Later Roman Empire*, 3rd edn. (Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 2011; orig. Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 1956); Wallis, *Neo-platonism*, 105-7.

(43) Synesius, *Ep*. 105（四〇九年頃に書かれた兄弟宛の書簡）; ed. Garzya, 188-90; trans. Fitzgerald, Letters, 196-202, at 200. また彼が司教職を受け入れてから六か月後に、海を越えてギリシアに逃げ出したいと記した以下の手紙も参照せよ。*Ep*. 96 to Olympius, ed. Garzya, 164.

(44) テオフィロスに宛ててシュネシオスが書いた手紙を参照せよ。*Ep*.9 (ed. Garzya, 29-30), *Epp*. 66-69 (ed. Garzya, 105-25), *Ep*. 76 (ed. Garzya, 135), *Ep*. 80 (ed. Garzya, 145-6), *Ep*. 90 (ed. Garzya, 152-3), trans. Fitzgerald, 116, 147-160, 166-167, 173, 177-78. テオフィルスに関する最近の研究は以下参照。Wagner, 'Theophilus of Alexandria's Ordination of Synesius'.

(45) *Ep*. 11, ed. Garzya, 32; trans. Fitzgerald, Letters, 96-97.

(46) この危機をシュネシオスがどう対処したかについては Allen, 'Brushes with the *Imperium*', 48-50 を見よ。